https://www.city.chiba.jp/kyodo/

ちば市史編さん便り

Chiba-shishi News Letter NO.30 2023.3

近世・近代の千葉町物語……1-2
第２回　徳川家康が宿泊した千葉御殿はどうなった!?
「資料保全」を考える……3
―千葉歴史・自然資料救済ネットワークとの協働から
新刊紹介・令和５年度企画展のご案内……4

近世・近代の千葉町物語

【第２回】　徳川家康が宿泊した千葉御殿はどうなった！？

市史編さん担当　土屋　雅人

千葉御殿って何？

江戸時代に佐倉藩領の町や村の位置を描いた「佐倉藩領村々絵図」[1]という絵図があります。この絵図の千葉町周辺に焦点を当てると、千葉町と書かれた左側に「御殿址」という表記があります（図１）。

この「御殿址」は、千葉御殿の跡地を表しています。千葉御殿は、徳川家康が東金方面への鷹狩りの際に宿泊した施設で、現在の千葉地方裁判所（千葉市中央区）の敷地に相当します[2]。少なくとも慶長 19 年（1614）に家康が東金を訪問した際は、東金御成街道は造営中であった可能性が高く、既存の道路体系を用いたと考えられます。つまり、船橋御殿－千葉御殿－土気茶亭－東金御殿の土気往還を経由するルートを利用したのです（図２）。千葉御殿については、方一町ほどの周囲に土塁と堀を巡らした方形館跡であったと推定されます。徳川光圀の『甲寅紀行』には「右の方に森あり。東照宮御旅館の跡なりと云ふ。」とあり、光圀が訪れた延宝２年（1674）には、既に御殿の建物等は残っておらず、森林となっていました。

図１　千葉町周辺（「佐倉藩領村々絵図」）

佐倉藩の御林となった千葉御殿跡

寛政元年（1789）５月、佐倉藩は千葉町の忠蔵に御林守（おはやしもり）を任命します。御林守とは、支配領主が所持する森林（＝御林）を管理する役職で、忠蔵は千葉町の有力者の１人でした。千葉町にある佐倉藩の御林は８か所で、そのうち忠蔵が管理した御林は「猪鼻御林」と「御茶屋跡御林」の２か所でした[3]。後者の「御茶屋跡御林」は、別の文言で「権現様御茶屋跡」とあり、千葉御殿の跡地であったことがわかります。その面積

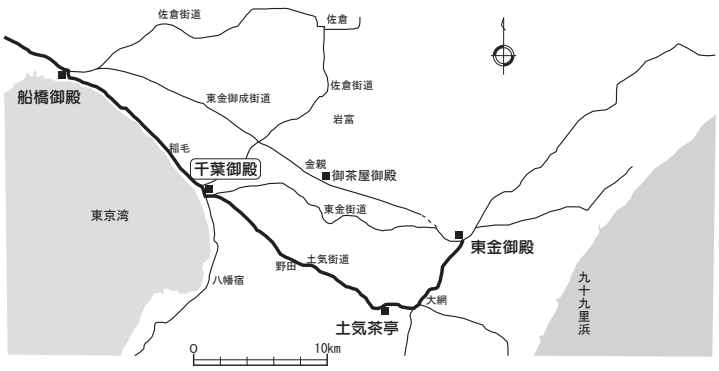

図２　房総の御殿・街道関連図

↗

↘は、6反6畝20歩（＝約6,600㎡）ありました。

戦国時代の城跡は、江戸時代に御林に指定され、勝手な立ち入りが禁止されました[4]。千葉御殿の跡地についても、佐倉藩は御林に指定し、旧跡として保護していたのです。

佐倉藩の御役所となった千葉御殿跡

江戸時代後期の「千葉町家並図」[5]を見ると、川沿いに「御殿地入口」「御殿前」と書かれています（図３）。また、佐倉藩の「年寄部屋日記」[6]文政８年（1825）の条目に、「千葉町御殿地御役所」「千葉町御小屋御殿地」などと記されています。19世紀に入ると、千葉御殿の跡地は、佐倉藩の千葉御役所として利活用されていたことがわかります。この千葉御役所では、江戸湾の沿岸防備における人足の動員や管理、または藩領内の年貢米の管理と江戸への廻米などを行っていました。

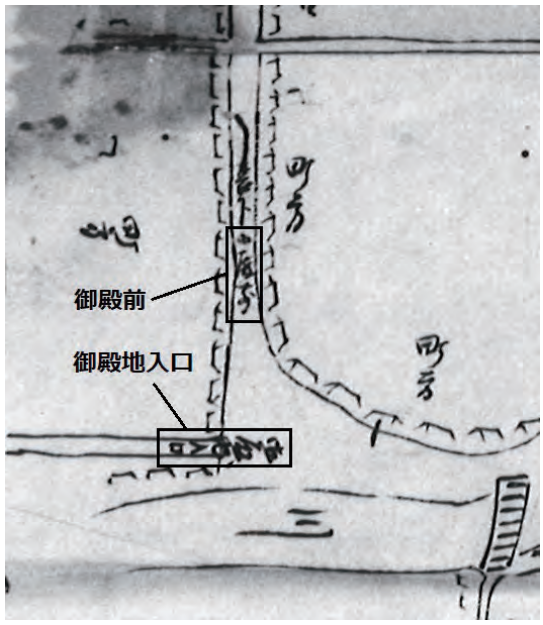

図３　千葉町家並図（部分）

さらに、文政９年（1826）８月、千葉町の忠蔵は、「御茶屋跡」に所持していた新畑（反別４反２畝24歩＝約4,237㎡）を佐倉藩に譲り渡しています。藩はその場所を御用地とし、翌月に土地を譲り渡した忠蔵に、御礼として三組盃（みつぐみさかずき）を与えています[7]。佐倉藩は、文政８年（1825）に炭の専売制度を開始し、同10年８月～９月頃に千葉町炭会所を設立します[8]。千葉町炭会所は千葉御役所の脇にありましたので、佐倉藩が忠蔵に「御茶屋跡」の新畑を御用地として譲り渡すように要請した目的は、炭会所を設立するためであったと考えられます。

保護から利活用へ

徳川家康が宿泊した千葉御殿の跡地は、佐倉藩の御林による保護から、藩の千葉御役所・千葉町炭会所による利活用へと、管理の目的が変化していきました。

近代に入ると跡地には、明治８年（1875）頃に千葉地方裁判所が創設され[9]（図４）、現在に至っています。

図４　裁判所（明治15年迅速測図より）

周囲には土手が残されていることがみてとれる

註

1 佐倉市所蔵文書 1-14878（佐倉市教育委員会所蔵）
2 築瀬裕一「千葉におけるもう一つの御殿跡－千葉御殿と千葉御茶屋御殿－」（『千葉いまむかし』18号、2005年３月）
3 拙稿「在地史料からみた下総台地藩領の森林～佐倉藩城付領と結城藩上総分領～」（『関東近世史研究』90号、2022年６月）
4 竹井英文『戦国の城の一生 つくる・壊す・蘇る』吉川弘文館、2018年
5 旧白井家文書８（当館寄託）
6 下総佐倉藩堀田家文書 6-113 ～ 118（日産厚生会佐倉厚生病院所蔵・佐倉市寄託）
7（明和２年～慶応２年）「（万控帳）」（旧白井家文書２）
8 拙稿「佐倉炭の流通と市域の四町村－千葉町・登戸村・寒川村・泉水村－」（『千葉いまむかし』19号、2006年３月）
9 古川國三郎編『千葉街案内』多田屋書店、1911年

「資料保全」を考える―千葉歴史・自然資料救済ネットワークとの協働から

令和５年（2023）１月８日（日）、千葉市立郷土博物館講座室において、千葉歴史・自然資料救済ネットワーク（以下、千葉資料救済ネット）との共同史料整理が行われました。

今回整理対象となったのは、主に明治期の小中台村関係と思われる史料群です。この史料群は、2021年末、ネットオークションに出品されているのを千葉資料救済ネットが確認、購入をしたものです。現在は千葉市立郷土博物館に保管していますが、目録作成などの整理が未済であったため、今回千葉資料救済ネットの有志のみなさんが整理作業をしてくださいました。

今回整理した史料群

木箱ひとつの中にぎっしり詰められています。

通常の古文書整理と同様に、現状を記録し、史料一点一点に番号を付し、中性紙封筒に入れていただきます。これによって、史料のおおよその内容や点数を確認できるわけですが、そのあと、それぞれの史料の内容を確認しながら目録をとっていく…という流れで作業を進めていただきました。

この日は、県内の文化財関係者、学校教員、学生、地域の方など、多彩な顔ぶれでの作業となりました。いまだ新型コロナウイルス感染症の影響から脱しきったとは言えないことと、なにより当館の作業スペースの関係で、少人数での作業でした。古文書の整理作業が久しぶりだったり、あるいは初めてといった方もいらっしゃいましたが、「手練れ」の千葉資料救済ネット会員とチームを組みながら、着実に、素早くかつ丁寧に作業を進めてくださいました。

史料整理のようす

今回の史料群は、「たまたま」千葉資料救済ネット運営委員の目にとまり、「たまたま」会員でもあり、かつ史料群の内容に該当する地域でもあった、市史編さん担当と連携をとって、運良く救出することができた史料群です。

特に近年、代替わりにともなって「整理」されて流出する資料（古文書以外も含むので、「資料」と表記します）や、新型コロナウイルス感染症の蔓延による在宅時間増加を契機とした、いわゆる「断捨離」によって流出する資料、こういったものが増えているのが現状です。古書店だけでなく、気軽にネットオークションに出品されている古文書も多くみかけます。地震や台風による水害、火事などの災害によって失われてしまうだけではない、資料散逸の新たな要因が増えてきているのです。地域の過疎化が進み、「空き家」となった家にそのまま残され、誰にも把握されないまま失われてしまう資料も数多く存在します。個人で所有されていた資料が、全国的に危機的状況にあるといっても決して言い過ぎではない、そうした状況です。

千葉資料救済ネットのみなさんの活動は、もちろん資料レスキューそのものにも、その力を遺憾なく発揮してくださるものですが、千葉資料救済ネットには、こうした失われつつある資料の情報をキャッチする「アンテナ」としての側面があり、そして我々のような自治体とつなぐ「ハブ」でもあることを実感しました。また、我々自治体史編さんや博物館は、そうしたつながりから得られた情報等から救い出される資料を、情報も含めて後世につないでいく責務があります。

もちろん、資料が失われないことは大前提ですが、今回のような事例が周知されることによって、捨てたり売ったりしてしまう前に「ちょっと連絡してみようかな」と思っていただければと願ってやみません。

千葉市史では、ほかにも房総史料調査会にご助力いただいて史料整理をしていただいたりと、さまざまな「つながり」に助けられて事業を進めています。こうした「つながり」に、あらためて感謝したいと思います。

遠藤真由美（千葉市立郷土博物館・市史研究員）

令和５年度企画展

商人（あきんど）たちの選択
～千葉を生きた商家の近世・近現代～

千葉市は今年県都となって150年の節目を迎えます。近世から近現代への激動する時代のなか、県都千葉において新たな事業に乗り出す道を選択した商家、または新たに店を構えて進出する道を選んだ商家がいました。

本展では、そうした商家のなかから特に岩田屋（和田家）･多田屋（能勢家）･奈良屋（杉本家）について、商業活動のみならず、社会的貢献活動や文化活動も含めて紹介します。

奈良屋呉服店千葉出張所

多田屋書店（いずれも『千葉街案内』より）

会　　期
2023年7月11日㈫
～9月3日㈰

会　　場
千葉市立郷土博物館2階展示室

開館時間
9：00～17：00
（入館は16：30まで）

休 館 日
月曜日（祝日の場合は翌平日）

Book

令和４年度企画展関連資料集
『甘藷先生の置き土産～青木昆陽と千葉のさつまいも～』

本書は、令和４年度千葉市立郷土博物館企画展「甘藷先生の置き土産～青木昆陽と千葉のさつまいも～」（会期：令和４年（2022）８月30日～10月16日）関連の内容をもとに、資料集としてまとめたものです。
知られているようで、必ずしも実像の定まらない青木昆陽の人物像に焦点をあてながら、昆陽の「置き土産」とも称すべき、千葉市域におけるさつまいもの「近世・近現代史」を紹介します。

A4版　80ページ　令和５年（2023）３月刊行
定価700円、千葉市立郷土博物館にて販売

千葉市立郷土博物館　検索
CLICK!

問い合わせ先
千葉市立郷土博物館　市史編さん担当
TEL 043-222-8231

お宅にのこるその資料、捨てないで！！
STOP

古い書付や写真、民具類など、台風などの自然災害やそのほかの事情により濡れてしまったり、汚れてしまった資料がありましたら、その対応のお手伝いができればと思います。これらを捨ててしまう前に、可能であれば、**市史編さん担当**までご一報ください。お宅に残る歴史や思い出を、少しでもよい形で後世に残していけるよう、できる限りのお手伝いをさせていただきます。

あとがき

ちば市史編さんだより30号をお届けします。本号では、「近世・近代の千葉町物語」第２回を掲載しました。昨今話題の（？）家康が泊まった千葉御殿についての論考です。また、令和５年１月に千葉資料救済ネットのみなさんにご協力をいただいて行った史料整理についても掲載しました。上記の「捨てないで！」とも関係する話題ですが、市域に残るさまざまな資料を、さまざまな方たちのご協力を得ながら、少しでも多く後世につなぐことができるよう、尽力していきたいと思います。引き続きのご助力を、どうぞよろしくお願いいたします。（え）

ちば市史編さん便り30号　Chiba-shishi News Letter No.30
発　行　日　2023年３月24日
編集・発行　千葉市立郷土博物館　市史編さん担当
〒260-0856　千葉市中央区亥鼻1-6-1
印　　刷　株式会社みつわ